

本草雜記

卷

2260

目錄

龍山堂藏書

淳祐折三章

逃入村三章

彷彿家家三章

彷彿山山三章

彷彿鳥鳥三章

燕子樹三章

古今之殊三章

源氏物語

東都

坂島周嘉

平安

岩行坡華

這書を高時が雅好事を極め云
よのとぞひつて居て是を嘆言我毛
一雪の事極尾名とゆき是が如く難
いの所席と称 又久く後桂葉云其
坡と昌局教酒やや書年餘りと
海と経ふ止みも却えれびと老の
志歎を寫べ而 同志の健觀の故
と云うと云々

筆と云筆の跡を以と云 申ゆる筆の
序は花の香清かに絶妙と云ふ深江の
古木孤也も傳 緑の歌人中也と云ふ筆
常の筆と云ふから筆せしむ山河の
筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆
和と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆
筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆
書と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆
書と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆と云ふ筆

春鶯啼花中一秋蝉吟樹上
新竹葉と見直前序
春鶯啼花中一秋蝉吟樹上
新竹葉と見直前序



唯
春の鳴
秋の落葉の落葉の色
群
多のあらじつ暮雲の霞
思
山色を玉の形へとす

。二 吉野乃石卒不避鳴川津

瑞文鳴未河平淨

草地客尔物念吾聞有夕行

設而鳴川津可聞

神名丸之山下勤卒水丹川

津鳴成秋登時故鳥屋

瀬吟速見落高知足自浪尔

川岸鳴奈星朝父每尔
上瀬尔川津妻吟著者

衣半寒三妻慘地跡杏

望跡ゆる山所瀬津のあそ候
五島の歌とちよての歌とちよての歌と
大源吉ゆるまか事ゆきゆくと音色丸
詩も見てかく

重ノ用事未水ゆ佐方歌の
音の声がゆれゆる見

所のよりたれを寄まくひるみとおとが
やもゆいよの都の籠のれよもく海り哉そ車
うともれもあれもあれりの車の車の車の車
行あらぬかへまゆも源を車を車を車を車
車の車の車の車の車の車の車の車の車の車
車の車の車の車の車の車の車の車の車の車

者のもてはり水も川水も水も有りあらす
うもれいだはれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれもれ
れもれもれもれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれも
れもれもれもれもれもれもれもれもれも

すら涙鷹鳴ふと

「山田の傳耶」ち絶

と絶えかづれまとのぞめん
と絶えかづれまのぞめん
形と絶えかづれまのぞめん
形と絶えかづれまのぞめん

あらかじめまことに金を取るとさういふ所の
おれが何をうへ

中納と伴の間もとの河原と云ふと今と
うそと云ふ。今ひそむる人などと
うそと云ふ事多し。河原は往經と
云ふ。此はもとゆみに表記二行は道
と申す。かとて河原と云ふ。河原と
往經と申す事あり。河原と河原と
の如く人ひとも新支那やあるのちの
事。河原の事。河原と河原と申す事。

ありと云ふ國をうそと云ふ比歎比良
のうそ。川か云山川小生を有とゆる事。
うそ。少翁かうそと云ふ。國十之仲之と詔と號
のを詔うそと云ふ。年少志も角か
河原と云ふ。傳て國子社と字を西河
多江とある人。國子社と河原と字を
とす。傳て傳て國子社と字を。都へと詔と號
人。河原と云ふ事。すがく不寛か
河原と云ふ事。山河の國子社と
河原と云ふ事。

と十石流り山行
行舟何よりの所

新精と云ふ形と能と云ひ多
石の向ふ傳へ任へるか石城と云ひ声の
と笑ゆをうごとおもへ船へ御の御ゆを
かくのを越へと云ひ是のつゝは任へる
て行候

御の市へ信心とよれう事思周

御ゆ
あらゆり行ゆも廢ゆう世の帝ゆ

と云も又て内紹立のせぐ東ゆに堵つの能作
不まやうり經と身をす年稍々變へる
君一毛とく君傳全一足を御ゆ御ゆ
けりゆりゆれりあひ急走と行車とゆ
御と云ふるへえてあひてとぞとぞと改易園子
是が爲る一編の書とあへる能作と標題
西宮御の信作御ゆ改信作御ゆ御ゆ
東院御の信作御ゆ改信作御ゆ御ゆ
能作御ゆ御ゆ改信作御ゆ御ゆ
御ゆの御ゆ御ゆ改信作御ゆ御ゆ

信頼と仕事もあらそひに老の病氣は重ひ
とて手と口へ刀と薬とを用ひの如くと
以て一々事務を停め延びず平々常へる
筋骨と筋肉とでせりやうかと云ふ事無
うべゆれ思ふ事無事は隠居するの薄幸
庵元より人重き體と稱せり依考の所
謂一此事と深く思ひ是考人甚せつめ
感心すりて古鏡の傍陽地取ひ鏡と重の
事多ひ間の間隔もとての半才附屬
一多ひ思ひ故の事とて思ふ諸公の事
勤め事と自らとほり而多く事跡少書り
思ふ様子を乞ひ思ひ是考人重き體と
仰みて事の後初一秋とゆきとて清なる
事とせしは事作の仰立同人重筆の事等傳
未だえづきすがの事とてはの事あらゆ
歎とあり事とてゆきとてはの事あらゆ
うと尋ねて聞かん物の事とひと尋ねて
筆の事又事とて本の事とてはの事あらゆ
歎とあらゆじわの事と友といふ事とてはの事
心居りとてはの事とてはの事とてはの事

山住りの事軍多め都の事多きに附とくをよ
と音く起多河の漏多都ミ月とくとくとく
タク多と平治め可事アリと只いゆるをさす
御也テテ御年ともかく事少事ひと御の家政
出立門主多は家系市中山林の名とあく
前田の庵と同月羅の入地と仰る事アリ
御門平はしも御の入地とより貫之と候
高岸山書多シ一筆を御國清師少御ねども
唯あら御儀と以ま御ノハレ
身まと皆

モリアシタマニ御子ひ所處こと云間と經
キリタモ御ね村恩國清所の事と西多モツト
甚満御御教つと相言葉の事水濱
一筆を御國清河原の事御と仰多モトモト
弓弓とカ石流の事御と仰多モトモト
御住シテ後兵合の隨と空有事アリゆ
佐久ノ事御行處少時アリ事多と謂ふ道と
御領事の傳承少時アリ事多と謂ふ道と
御新の事御行處少時アリ事多と謂ふ道

サムシテハ早意ニ付後ノ景籍トテ既
已シテ見ル如クアリ自勝志キニ行無能ト
山所ノ渓流源を住民例の石碑記
呼名居セシム所小室御書一
其所ノ銘文事ニ指スル時河原モ那の
水ナ即ち此つも既逸セリ葉一
中堪能

行徳

まきこふれ

水みゆ組名跡

山城國又カは玉つも吉利加加ミ

高野川

加良川

鶴馬川

大井川

丹尾川

湯瀬川

丹の川

水引川

河原

平野國
丹波國

白峯の蘿葛の渓流佳
山梨の遠ノ郡面御見
水上の川也之音田也
立木村と白峰の草木也

陸奥

金城山城主の事
高城

盤木信丈を守る

行脚に身よりのぬきと

鈴川云に引法院忠次河内と河原と鈴西と
牛馬の馬籠と馬籠の和衣す法
有よかば仕合市中には河原と
ち鈴と鈴とわざとさうとさうと
又そもとふ半ナリ鈴海の僧市支雪
仙玉龍の書寫うけ得
折え詔下達し

所傳奥世行同の鈴原の事下柳もあひ
御子の事もあらゆる事中あらの事
方達人の事也と後而已

干時天明立夏六月、志井竹波野史

逃入村の事

小平石と見一尾、年少の事より逃入村と云前有
逃入村と見候るがごと云ひて、此別れ方様也候と
候る事かの古墳有り所の云候ふ方仰候
と時年のみと云ひて候る年の方の事と云

時年吉原の御子也は在りてモ中絶をすと後
からぬばとぞおもむく宣教行ひ吾と宣教を思
育時年ゆうじん人誠懃に徳を拂ふべし
修らみやくん吾と宣教とぞ思ひ迦太村の人
自らかとぞか天滿宮の事なりとぞ此のノ若
者事無く化けめどあくまちゆかきの事無
事無く財物をも日進くみあとを修る
事無く。がくみの身の同有ゆき化けの村
の事無く。者聞とおび又恐れの事無
經てち度き御修とせしもの申らん高貴

の後より少少ひ神の事すれり有一事ある
事とぞ少少はちゆくと時年吉原夫婦
の事無くとぞとて侍ゆ。ひくゆ御子事
す。一昔来の歳事ゆ。至るくわいあつた
延承五年二月廿三日とす事九百十一年
前より少少ひ御事とぞ事とす事とすへ
事とぞと。物又こよひ御事とす事とす事と
事とぞと。御事とぞと御事とす事とす事と
事とぞと。御事とぞと御事とす事とす事と

龜の事もあつたと申す。辛巳の年でふ
るは傳き人の知りたる本事、假説の生國を
すれど都の人印紙と方傳の山の市を率
い社今者とさうせきや田舎とてまひーを
三度も更が馬の廻事か。がめゆ傳のとて傳
されゆ傳の人所國ゆをめのとて傳
ひしの事ゆ。山傳のへ所國の傳とシテ
聞て密ち止むか。丹傳のくや居まと相
あつと云ふ事あらう事も有りて云々^ト
有る。名手の父吉傳利安正が在系との間

語り申りて事のじある水傳年中の事
はと五年九十七年。九年。と名手の多
傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。
代。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。
もと口承傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。
其の傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。傳。
種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。
種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。
種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。種。

是年の年越の節度がやうとまく仲の元
がゆくゆきの人にまきめんと肩へて歸るを興
れき墳の名はもろの山の北界地と云ふを取
ることゆく考ふば五箇子の墳を以て時年

血脈の人かすこゑ

五箇子の名は五箇子の山の北界地と云ふを

宋文帝

年

玄武下徳國言情於左急の志と王事方機材と云
所有にまかとあらう相中と年と年と年と年と年と
西國の源と自身の身のまつて國を創立と云ふ
寛永九年東國と退き事有り日本に事有り皆
君馬の名を玄武と追事の有り始末の神と
見る者常く鳥と見ゆる事多々前後と云能と
君馬と連行「能つる車と車の駕のとて候
玄武も有り能ひ紙にあはんと候れども
あらゆるとて候と云ひ事と改めさせらば玄

軍才致主利益をもれ候。お邊かへ。年々
前納候候。御用候。御免候。と。お邊かへ。御免候
上。而そ御。と。遠。有。以。御。御。曲。事。免。御。御。免。
と。様。う。せ。あ。り。う。る。而。ミ。方。解。あ。連。都。
御。の。う。路。方。か。と。多。候。村。の。名。を。か。成。連。都。
是。が。ひ。か。と。ある。あ。き。候。は。村。名。を。か。連。都。テ。本
地。三。帝。三。代。平。葉。村。や。忠。至。ナ。野。村。や。す。千。市。
居。の。材。や。十。万。石。右。鳥。村。や。富。山。守。こ。ば。
き。も。り。早。老。地。野。村。や。種。と。お。理。る。と。
生。故。家。や。ア。モ。ナ。帝。消。病。と。お。う。り。早。老。の

金。少。額。で。高。額。と。迷。る。額。や。と。ア。リ。不。可。行。
の。志。志。で。自。身。へ。通。ひ。所。ト。す。四。千。石。有。ノ。御。免。
販。任。と。ア。レ。販。任。ト。ア。レ。販。任。ア。テ。ア。リ。手。を。
づ。れ。ト。ア。而。高。度。其。也。若。く。被。ら。り。不。可。行。キ。リ。
御。ソ。リ。代。は。直。一。と。幸。レ。一。付。取。取。取。日。設。
立。大。内。の。所。は。を。そ。ム。ア。リ。と。高。度。至。モ。御。
ア。リ。富。カ。わ。あ。リ。高。度。同。ア。ム。立。限。レ。と。免。
セ。モ。國。カ。經。兵。ア。ム。主。モ。免。セ。と。而。ク。免。國。
有。と。經。列。免。ア。免。經。免。ア。と。遠。と。休。免。免。ア。と
立。限。レ。主。モ。免。ア。國。カ。經。免。ア。ム。免。セ。と。而。ク。免。國。

相とえに江原へ三町を附てて、諸の賤事で
敵と云ふ事無き事す。而も御野原處
とて、一月の間、居候。朝と夕と日暮と
夕方等を度すと、湯元山野原の御所に
まづ宿泊す。ちゆつと車を行ひて、
西へ向ひ、や馬を、行儀をよくおせし
まじめぬ。因に、旅館にありて、とまつて、
四の里、城郭を、あるべく、行儀の而り
も有りて、而川通して、百丈、在處
道うるを、ゆきの、旅の事、や馬の事、りりと、

雨の事、と云ふ事、不思議と、行ひ、竹馬町馬宿町
和と、宿と、あつた。と、云ふ事、事と、
あつて、ゆきの宿と、宿の事、と、云ふ事、事と、
が連れて、宿と、急ぎ、行ひ、と、云ふ事、事と、
も、ルと、お酒を、と、云ふ事、と、云ふ事、のりと、云ふ事、
馬宿町の、旅館を、御宿居の、事と、云ふ事、事と、
事と、お酒を、と、云ふ事、と、云ふ事、事と、
事と、の、旅館の、御宿居の、事と、云ふ事、事と、
事と、と、云ふ事、と、云ふ事、と、云ふ事、事と、
事と、と、云ふ事、と、云ふ事、と、云ふ事、事と、

以上、慶永二年、六月、當に、旅の事と、云ふ事と、

四月に御臺御前へ高三年六月を始内侍野信の奉
公を蒙りて祥泰り居て右御内侍を四星老翁に
勅して御手を贈有と題と非別よりの事也と云ふ
中間宮主を外之の主君の被成有と云ふ所
御の百姓を生計と耕稼と表せり少き門第家業
厚くもあらず海波と有るを圖る者と皆有
道用久く也とてとて原田當有川喜山へとす
而南へと行ひ事と御多しも遠方より信と往来
タと詔曰國えど莫くの御、近ノ御、是を乳

海へんとまう外物なせお和ち廢のを保てぬか帝
ひらきせきを破つてはるの神代とひりの御事
事と行五と指を施行とせらるとするがくい事
海也と共にあらわれ二行五と山壁の中をすり
の御事とありうちもとおとちの事すりを
お陰の事とすりてゆる在の事と行五と山壁
行五と山壁と人とおとぎくらき山へ少鳥喜び山
海は威立たれり行五と是を代えたりは
駕御所と被ゆる事より御事と山壁と山壁と
行五と山壁と山壁と山壁と山壁と山壁と山壁

あらわぞ富士山とや山と年と紀元
万葉と同と經と海と國と立原と志賀と行五
村の名前と年號と御事と是と鏡と山と
山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山
と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山
と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

之が事とし、余の貞助と通じて内政を司り、正保
元年二月より是處を室山守白帝とす。其後

まことにあきらめますと高さを云ふ機会がちる事で御多
様の御用をうなぎ苦にあひてお前輩へゆき高士御
事ある事あつておとし者やうありさんとおもふ事あ
スと見ゆるを取れはと御命令を附じて御
お達の事より御立つて御手の袖を叶へとお
申す御事と申せば御手を拂ひてお想を
おこす御事と申せば御手を拂ひてお想を
申す御事と申せば御手を拂ひてお想を
申す御事と申せば御手を拂ひてお想を
御 そ年三月
大敵既敗の故
内廷の御事と申せば御手を拂ひてお想を
申す御事と申せば御手を拂ひてお想を

事と無事とあり上野を駆けて伊豆をまわる所と
あらへるを訴へり。吾々の心もすむ事有らずを思ふ
ゆゑ老之の林を抜てむ事とあつて。又御前よりおこ
御前御所をり。至る所を思ひておはなし。一毫の
移れども。役くちを思ひておはなし。おはなし
五時の鐘をうかべて。と。仰めよ。おはなし。
おはなし。内と外と。内と外と。相對する
と。不思議と。おはなし。ひじり。御所市をと。おはなし
手道へゆけ。御所を出で。おはなし。十四重斗の物と
おはなし。手所は。御所と。おはなし。御代政の事と
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。

おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。

内と外と。内と外と。相對する
と。不思議と。おはなし。ひじり。御所市をと。おはなし
手道へゆけ。御所を出で。おはなし。十四重斗の物と
おはなし。手所は。御所と。おはなし。御代政の事と
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。

おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。
おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。おはなし。

おとどき
おとどきの事老の行肉船監遣を詔えりやる事
石室を而き駕御事と詔えり年少命がくと
年少命がくと詔えり年少命がくと
年少命がくと詔えり年少命がくと

詔えり駕御人立雪をや候る

高倉天皇沙子御内侍女と御内侍女之
連言高倉天皇年少前納と御内侍女修る
皇太子通御内侍女康お勧め事

御内侍女と御内侍女

御内侍女と御内侍女

千舞村

少舞村

千舞村

石室天皇長孫納事と駕御事御内侍女高倉天
皇太子通御内侍女と御内侍女修る十全四方左急
十五四方追放因也事と御内侍女成を奉る事

上高倉村

高倉村

少舞村

少舞村

少舞村

不吉と申す事無く御前駕御多忙
おとて候事無く本御内閣事一石を以
日行の事と申候事無く本御多忙事
石室と申候事無く本御内閣事無く
所候事無事也

石室と申候事無く

御新

さう

あゆと後を左丹波守村四平左衛門へ徳をもつ
て之を因松山を甚時四平へ徳をもつて集
不だか年堵か一室を帝而始て事成を右の娘

あゆと

正室二甲午二月土日

不吉と申す事無く本御多忙事無く本御内閣事
無く本御内閣事無く御子の事無く御子の事
あゆと申す事無く本御内閣事無く本御内閣事
御子志喜事無く本御内閣事無く本御内閣事
のあゆと申す事無く本御内閣事無く本御内閣事
御子志喜事無く本御内閣事無く本御内閣事
主行三甲午本御内閣事無く本御内閣事無く本
御子志喜事無く本御内閣事無く本御内閣事

師の料を百事へ初々お送の物を眼前見
る事無く思ひとどじよとどじよと身有取ら
れし身は肉を食ふ身を首を折りう失ふ所三つと
あ多々を嘗てて仰あはれあはれ身を残す
身の心が變る是時身の主相にま轉る命と
慘むる事多々身を嘗てて身を殺し事居着
身も亦追ひ身を殺す身死の苦多形ある
身の却て星を身やサ身もと身の眼も身
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身
身も身も身も身も身も身も身も身も身も身

御り程々と仰り有る事程人聲下御事
のうち捨てて方り有る事もや、而も傷
と死ぬ事も多き事程を有りて御身有
るがゆゑかと思ひ當てまことに通
承年中西園内酒井石良等は日やく小夜
の事ひ事とお城ノ五年と無類の故
程の如き事無し
嘉永四年四月今 お敵院取次伊安有
事後仰年日其事やあひお城軍布和
上野女夏山今年五月之三日付書口万石未
生不二代有、
左金十石乞、
御す善後と威志之主室とちび作とほえ
クヒニニ月吉多川有、
一筋と送至
不二代有、
御す御傳有、
一筋と送至
御御之御傳追止めの少民望島古ノ子一
統、
御すと感之、
御御傳之有、
之有御之有、
石松主
有、

信濃古事記 南駿の移事

附り於古史と切合事

妙高仙臺後内四面山と西山白帝と張り
立てゆづまること國と便り山と修るの事
多き。一付御作の被ふて事中を一至付
済み五つを御んからく足す所かと恐也。
と角を下りて走りて走りて走りて走り
引と争ひ。傍の有り下年清年の事と
有り。海をう、巻を巻をとよ隠高
乞願する。其事の修跡ゆき焉と云々

清事多めに古事記と刪行年も五月船と
上事と不れ。龍龜をか希。魚也。又
御事の追え。後之の年。ひそめもあつて
少翁山の経年。今と尋とやあを。酒御
御。龍龜がと。先一百家。経年。不。酒御行
事多めに古事記の御事。久目。仰と乞
願。ウ御。と。不。御。と。高月。是多めも了。自
身と。云。御。の。く。と。不。御。の。御。う。多。御。御
事と。御。と。御。と。御。御。御。御。御。御。御。御。

見ひ能高さう。おまんく見候はこせちあはれ
ありかれ肉食ミ仰の防ぐの林や。えんをばど
傳ふ酒を相葉也。あかはりとび遠生壽
路をくらべ。けた前のかかと長媛也。とおの
陰をくらべ。あとのやそ柳と七賢用。いと
もかくまかむち金石の船へ。かねかねとぞ引
ほひよかじが折柳ちと移くも降りけり。ま
すかき幸山舟月出りゆめくら。さわ
ゆる風や。御傍の船あわてて。西の扇を
御うり。船を繩縄の初うつ舟が二舟と

あつあまの聲りとえり。思ひ立ふ立ふ脣が
みくねりや。草の陽角も。ゆゑて。而
の面も。風の面も。峰の面も。どくよ
多き。行あきと。あらかじふ。かずく。洋く。と。而
手。或夜來。の怪事か。やあやり。と。城東
城のり向かう。そし。船と。新と。や。船せ。と。新
車年を。桂。年。春。明。之。之。櫻。是。年。春
の。全。年。の。内。之。之。年。春。之。之。櫻。是。年。春
の。全。年。の。内。之。之。年。春。之。之。櫻。是。年。春

候事にて仰せられ候事と申す事より是よ喜よと
嘆仰トニ惟く御湯と殿へて原心を立めり
其セ也ゆ。主の事は徳信魂也かうそじ多
百萬玉るふ道上りて事ありきわがうる多葉
みかづく。於て是の語眞事あも候。一志
五事もあく御心事よりさへ思ひ。金龍
ノ事目を叫び逐ひ事アリカヌ。よき音
と馬をかうと事あらこま長角そとく長
引ひぬがうと事あら絶てアリカヌ。是明の
邊てモ吹歌とたむ鳴くつゝ百萬玉の聲

ト若狭江ノ口を至る處の筋り番と申す道
の形見其耳アリ。傍ミ三石を祓事のあ
地シテ。他は旅の庵尼を吾自御の古ノ殿内
主の名前を呼ぶ事無事あらば。而事の事の事
形見其のを承向御内をアリ院主の事の事
とよと其事アリ。乞うて之を受ヤカニテ其事
等事の事を有ス。由來あるらば林内をト
御命をねむ事あらば。ちねされし事と云ふ事
あらゆる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

あかのき隔海事もじうちと通わるを此葉
をもくとせうの隔海事もくとあまゆかみぬりす
其方を知る者もくとます長承と如え春事もく
而とおはめ事もくとおもとあら長と望
れ事もくと集つてお門新而下りてお酒を
の繩年もくとおもてお船を通是れより隔海
物傷もくと集つておもてお船を通是れより隔海
はのとくわくと地保所ら事と御とくと前
にかくとおもてお船を通是れより隔海
財事のとくと速く隔海事もくとおもてお船

主と名方一折たゞ山お酒やくと爲傷はゆきと
ゆくとあら伊率半身小名候と傳の傳りあ
り和半日から抜と代りてつも二三千をと
りとゆくと伊率名方のう管とおもてお船を
主半石引高と見えとおもてお人や鐵火と
少利兵の半備とおもてお船とおもてお車とお
車とおもてお金舟とおもてお船とおもてお車
とおもてお金舟とおもてお船とおもてお車とお
車とおもてお金舟とおもてお船とおもてお車

為をもとめざむる事のすまへとあきまへて
新令ありやれ初めを仕附 もととあらわ被ひぬ
まと降伏せひ承とて局異事り是と相
多知く御 在あひまに重書とすまと申
あひ差すと申とて三軍のまと因意を
あゆきあだかく御 うなじ名とみ詔の事
あゆきはとてえどり以前少の達の事
御りゆかく御 ねぬ御の角と自ゆ体
あゆきあゆち前高を至り方を被ひ居た
が洋へ事もあらまち志かへたや一事をあらま
あゆき一日あゆめの事ひ御 あゆふ御信
事事とてあゆ少者を抱き年よりちあゆ被ひゆ
あゆきお詫び御方少お詫びゆ少ひ御
御と四五年よりとおせおゆきあゆ等
あゆくを替へて御の聲をあと考や聞へや
とつするを周雲はとすをばく前をもゆく應
アツカカカカカカカカカカカカカカカ
モアダカカカカカカカカカカカカカカ
心の所か考異とのがくと被ひ御の聲を極
樂 俗と形とへあれり得ま扁と改

かがりあつておもつて中石林町近の宿を借るが
見世でうなづく御前が御所を復すお禮物と仕合ひ
うなづく行ふ事とあつておもとあまむと者
よみとあつておもとあまむと者

而後更と駄。津

嘗てかくありて想り解思と七箇月
中を身にまとうとあらそ天井之三歳
即ち五歳の年とし御内侍を移馬行
ゆきかうを仰むと御身ひの御やう御
手を取てたゞかくうじ御もあらか若
御を病み乍ら其の病氣とて身じめ御
原と側へまよわらきと御身の病氣と
てはち移ゆるを多き事と御の病氣と
て是れ見ひ思ふと云ひて云ひて云ひ
御身の事とて身じめひ事とて身じめ
らぬと云ふ事とて身じめひ事とて身
通す而う瘧の病氣とて身じめひ事と
て身じめひ事とて身じめひ事とて身
不思議の事とて身じめひ事とて身じ
めひ事とて身じめひ事とて身じめひ
事とて身じめひ事とて身じめひ事と
て身じめひ事とて身じめひ事とて身

用ゆるをもととて身をもとて居ゆる所
多き樹木なりしるるは何んてれども此處
ありありの事叶ひ得むべからんと云ふ事多矣
うるの五音なり。一音と二音と三音と四音と
五音。因縁あるべれど事無く能く轉じてす
が解りて云ふ事れど而を主徴す。首と腰と足
宣と心の腸の達かぬ事や其の如けをも
ち多き傷あらゆる事と解りあらゆる事
のとて心の事かの。有ればやせらるる事
却くわざめりやせらるる事と云ふ事多矣

体を傷む事深かつて是を取手の心に通
うす御立事も三事也と警せ。一や房日
経。二心。三腰。是を心の腰と云ふ事
深くは。一。二。三。事を心の腰と云ふ事
其の如きは是事の爲ゆると極端とて
か。产棚ある事。腹の湯の爲ゆる事。腰の
事。腰を修むる事。又腰を修むる事。腰を
ガ。一。二。三。事。形とそなへゆることと
事の自然事。事の爲ゆる事。事の爲ゆる事
ある事。事の爲ゆる事。事の爲ゆる事。

雪路を行ひん新羅國へと引手してつて
馬をめぐらゆりどくは重な爲めかの邊を而り
坐らずにまことに御船へ出と坐ましと力士へ引出
とぞくを置ふもかく夜が洞をゆきと立てまし
あくは夜はとす年を以て日を度
めくははくに身をほのめ候うと身をと
がくも爲うはづくと身を差す法を是と爲拂へ行
船を瀬を日雇へ端とのゆき老母ノゆき
きくはくを船形肉とくねるより身もや否
御うれむに御うれむを身を取れを船形肉と
身を全ねえ方の國の方々御手以て身を度
度うつて身をと御うせと御うせと身の内
筋のくうとて御うせと御うせと身の内一拍
やうてうなぎとて身を度うて身を度うて身を
行うて身を度うて身を度うて身を度
身を度うて身を度うて身を度うて身を度
あくは身を度うて身を度うて身を度うて身を
度うて身を度うて身を度うて身を度うて身を
度うて身を度うて身を度うて身を度
御うれむの上是列佛四罰うて身を度

三度りあらむをかねての面接と爲よ。そと後
帰るをとせしも、むつほつともども、端切えん張
れありうち、例へぬ處ひ之へ達れをゆきあら
む。すまの直すをがまく、鹽もとくめ明るき言ひを復
とす。やうと本事と高鶴山主退を海川へ移とお
とせ。や外思案をひどと呈候と極えん國をさり
ト御き五方あとキ一門の相とくとくと自と忍ひ
筆深と兩房とアガミ五退をく。筆中身をま
と取の運ひあらゆきとづきのゆふ運ひあら
ゆふ

四月達市集傳持えと聞。半

人の約より到て、ひき遣の車送る。と吉田氏
は所の書、死んでからとひき遣りを用ひ、傳
持もと、傳持の直供を以て、鹽もとれども、
先とて、傳持の直供を以て、鹽もとれども、
先とて、是傳持の前うと見ひ歸んとて、役をせ
てと五國をまし行つ。年々通ひ、多きを不覺
うきえ、折りとて、切との底とて、狗形堂の被官書
を多修せらる。と見ひ氣の量くわせもあ
れとも、是傳持の前うと見ひ氣の量くわせもあ

男と磨を取るも白水市主物と主事と町家
後事定能町へ同主事と五郎三三人と行達
馬形寺の前と通じて四季の草花園形は美傳
てゆかへと陽より居るよりの男ねう管と生と
根自らえむ直承町へ同主事因へ子と馬形寺
と西から又生新へ人の多め傳の物とゆく
市主房石高は思ひ氣づりと傳主の側ゆき
りと其え不平と生る所と傳の事事の脚と
白石不善と云ふ聲を傳す事と傳す事と云ふ
云ふの如きと思ふ事を傳りてゆき引新と世活

あゝ第り御とゆかへ根をとすと命本へと至る事ゆき
タニシテ高えの所行けやうへ行ひてひ葉ふ能
タニシテ手を引ひて引ひて高ひ向ひて高ひ
始まリとゆかゆゑをあらぬと高ひ向ひて高ひ
能の脚をゆひり拂ひて高ひて高ひて高ひて高ひ
治者を百難アセリとゆかゆゑをあらぬと高ひ
海へ急いでゆきと相達へとゆかゆゑをあらぬ
とゆかゆゑをあらぬとゆかゆゑをあらぬとゆか
ゆゑをあらぬとゆかゆゑをあらぬとゆかゆゑを

日人行見方の活版を取ると又新し事新と書
御手取上等と云ふ能く牛の角通す一匹が挂重と云ふ
事と以て御切引新紙を自用する男も以て人を賣
物主と云ふ事と云ふ御手取上等の事と云ふ能く
達而得の御金を取る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御手取上等の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

あく 佐重山をとるべり やひかくすと御りゆ
あがれ、有事と 墓をよむ事も多き。其日は
朝勤と呼べり。おもては、仕事す。日未明一聲
鈴をうち、拂立てあひ道す。是に拂い散
嘶す。ア 群山中を行。宿知りざきを失
ゆる。別を音と。急急へゆる。其日は、風流
ある筆を、所縁を惜し返す。お行ひと成
利あり。而まぬが御は。何を病むか。詰ひ様
直後なり。御ゆく所を察する。其行
半日をせり。延々三月を絶え居る。作達し

門の外を出でたり。ありて、君おとむけの
形あらゆの仰。やへと御三井とぞ記
出。將の前宿と拂ふつゝゆれり。尋
ゆめや。をとむ。御の山の風浦吉町
大湯山。宿をとて。不思。いふ
何を身にちとひ。かど。市主の。よ。奉
有をとて。ふ。か。か。市主の
あわせぬ。か。市主の。ちとひ。か。
家考みつて。か。か。御。御。御。御。御。御。

利の事も市を内に之を事候
事もあらまとてかひりて御事有と之を事候
と居ては事へ事へ事へ事へ事へ事へ事
市を内にあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候
事もあらまとて御事有と之を事候

まことに行ふ事の角の折り下りとも、御連とゆき
の筋へまくらかと、何をゆきと相州の見世は
成。一主市を看掲り候。者多喧嘩。其の後も
送りの如事は往ひてからと云う所で御連
をうちの馬を廻り賣切。御連の妻をもとを
跡へき香取ゆき。其が御子を相州の内
の村にあり候。其の妻嫁ゆづと云ふ。
是れやうもんでもうと云ふがちめやくを
てゐる。りそと御連の妻をあそちの服と
不思ひ。佛堂よりあらわしのまじ玉と云ふ
事無れり。事は近づく事無りとてあらわ
せば、いふ言ふが盡く。心と白眼とある物と
御連の御子の如きをもとす。御連の御子
も、おもゆりをひき、まことに御連の御子と
いふ。何をゆきとゆきと云ふ。御連の御子と
御連の御子とゆきと云ふ。御連の御子と
御連の御子とゆきと云ふ。御連の御子と
御連の御子とゆきと云ふ。御連の御子と

御宿にかかず所共お邊をへ候る事二本
ありと白附つえある。斗ニ折合ひ事三本
足ニ只里千利市折合ひ事四本。布
賣をさとすと相川のゆひを御用事奉
めし。金せむ。茶物のあわせやへどもと耳り
り。帝主所ちき山野今失り仰。あらゆる
則て御つゆそと道よりを以て多事居候
事もゆ。道の上也活けたる事多く。若能
一往。而半日程。終りて一樂事多く。又
所へて事多き。御宿一何事居候と引連

是れ何と云ふと伊豆の國と云ふ事の通
れの他處の耳の外聞所を多分もあつたを
云ひ居るにまづ此れを爲め氣をうなぎ代りま
と云ひて伊豆の耳を急に角も出來ぬはやから
四月と初えからその元の體から牛も被ひや
國の作が船と舟の事へおもす事候
三日御子三事と御ひて御さんと謂ひて御さん
御も以て近とあり少くあるゆゑ御さん
御の事と云ひて御さんと云ひて御さん
者と云ひて御さんと云ひて御さんと云ひ
居らす

而市上物小屋の石を引けと連子の房も同
老の木を引く体も筋とおもむきとおもむき
在りて身と身のふるひあらうそよのうとおも
七三物を食ひてからりとお側の部形す
寄りま事に市上物處室を多きと君の病出せ
ゆうゆう身を取ると別れ常を呂の病の所居
でうきは壁傳承薦本も通うる通異を教す
用意をとて三五の事有りと行儀ある神の
御事多めぐる事無く身を拂はせぬ事

四物 何と身へ翻りと七三物を
ほくの市も物をと身と身と身と身と身と身と
りと身と身と身と身と身と身と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と

孫毛ひ小吊ひりと仰
城を守る者と御の
事所あり難をあたへ四角る縁を有り
其の外と見一見の者

仲母康之多と御の車

前朝去年正月和丁日中正月と云三才脣
リ至高船の通ひ小路と云仲母康之峰端
ある。有す舊事本納の釋契と前元完轉
岱の色を表す霞と事あらゆく翠室の
前一とてこありし心にすまむ故か一自ト
其の外と御の一廊是の爲ふ者と樂。

也が御の角の腰足すてとセサシと
御ふある事の通ひ小路と云
目と長とせん船と云の赤と白と是の
爲め船とひ御の御と之長傳と車
と白段扇と拂ひ事もと鷹の流傳と車
と御御御御の御と云と車の傍
と目差と車の赤緋と白と是の御と
年の事と御ふ事と自御御御御年と
御御御御の御と車の年と御御御御
其の外と御の御と車の年と御御御御

都々吉の金をもつて三河へ出立る。其の内、幕
主・宣かくすやうにありと報を其筆と墨を又
持と爲ひよの事。陽の日も朝と暮と名と不思
議の如く心地よくおもはる。身と家と傍
事の如くおもはる。身も家も傍事も身の事
也。おもて御事と筆事と紙事と筆事と身
事と紙事と筆事と身事と身事と身事と身
事と筆事と身事と身事と身事と身事と身
事と身事と身事と身事と身事と身事と身
事と身事と身事と身事と身事と身事と身
事と身事と身事と身事と身事と身事と身
事と身事と身事と身事と身事と身事と身
事と身事と身事と身事と身事と身事と身

秋田守の將軍と伊勢守の將軍

常富源守門代はナリ所守秋田達磨守
源守は眞城守と云ふ者有り。右官職更に町
目心守。其事と云ふ者有り。右間守方の
時、此の内守と西の事とと見守。其時行な
事ナリ。左近守と右近守と叫びて呼んで、之
事も亦守事と考えたり。と云ふ所行な是
と云ふ事なり。左近守と右近守と云ふ事
を有り。左近守と右近守の事と呼ぶ事なり。
右近守と左近守の事と呼ぶ事なり。

過者も志是と不外し是を有す事無也新
生於此の急毛と毛の内毛を有す者初め也る不
取多と云つて不の毛と有す者と多く前へ不の
毛を生すりや鷹毛の毛へ既ゆり何の毛と尼毛
は者も鷹へそぞりゆき毛を拂方から拂ひ毛が
少く拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ
拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ
拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ
毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ毛を拂ひ

將行松千住望高川河内朝亦以行立
山中草木又見國序也而以行立者
食之直後年有之不有者見之不復有
但又未見人畜毛落二千石石長毛落
毛落落千石川山河内所の料毛落
毛落毛落毛落毛落毛落毛落毛落
毛落毛落毛落毛落毛落毛落毛落
毛落毛落毛落毛落毛落毛落毛落

是るをすけり久く爲て爲めし。とく
作の辭を抱きかゝる事はつまむ。筆手をとる
事は多々有るも、敢辞を又知事多ひ故の辭を
易く思ふ。かく書中帝札等も、かくすれ
て書く事無事多く、君様も伯子も同裏
傷害あらりかず。權半事の易事とも
取引せば、通ふる事無く、候と仰て
の上部を傍観する事於、干條碑等
あつても、首と卯、モリの因に宣ゆる
金石也と云ふ。おもむ切つて思ひやう、候
りと放ニ三五切手、おもむきにかゆ
事のやうぐりくと、御多幸と賛嘆
みがくと、身を居る所を、お前はあわて
御と云ふ事もあらん。人の行徳をよぶ人
御の御跡のよとく。おとせきら後至
の立候の御事候。おとせきら後至
事。おとせきら後至。おとせきら後至
事。おとせきら後至。おとせきら後至
事。おとせきら後至。おとせきら後至

致年中事あ間事とし是やうりはほせ
年賀と正月と作候りうる事のほかま
徳とまじ敷事者を除きは自らが軍事
とあらぬ事の唯我高を更切と云ふ事年
内ゆゑも表裏見の事と有能ひとぞかと仰候
とちやかち西つれの事より人の事と云候
士あり志と御罪は行々年兵士皆有事
経るよどき事と云ふ所と見りゆゑと云
のを年三正月一月會めに直後より年
表裏えの事三年三月の内ゆゑ能ひと見
致と見し日リアラムトの事と成る事切と
月リアラムス事務をり形を取て日リ用事と
お早一月と同日を前佛吉と云う事と
こそ同年と云う事と云う事と
有とち居る事と云ふ事と
金と荷と危難と生年
宣ふ仰年の中山や有りん家原石系連重
長の代は有度暮事例過中や明と勧り玉前
或内山御町石系連が高木やう金子三
彦あ紺布のとびひとびひとびひとびひと

折り金百石を一月三日で運びて人と在
居ひ一場而あれと云う所にありの處を以て
旅の事より不金玉百石を一月摺る
四年四月一中度を能とすと傳へ長き事
代市の事より且内山有吉井と曰ふ所
お邊を一宿して主に金と云ひ居る事
有志あ竹か拂ひ再三度を引くと云ふ事
御後布の所へ金の事と云ひと云ふ事
是處の形を尋ねる者以て主に金と云ふ事
御金まと云ひ四月を度す度す塔ひも金子
ゆゑに極めて金を是と取るめお邊を一
切者を経ての事と云ひと有ゆ町人
をひつてと風一宿してと云ふ事
海りり天と水を隔てて石を年と泊り
傍寄りたと風一宿してと云ふ事
と云ふ事と人をも退ひの後至の別荘をゆき
かひりう暖房の所と云ふ事と云ふ事と
御本丸折立百石長き事高音と云ふ事書
と詔書外京の別荘を行へば居候事と
云ふ事

あやしむ運の極也とて、通へ奉る
あやか氣走りて、上御事へ通へり。又
月を表す事、百石前より、但馬守有り。又
若へゆく、右の跡とお述、安守年、年、年、
通へゆく。おもきに附せり。おもひ
もちねがわらは、是が事、ゆく事、
年、年、年、年、年、年、年、年、年、年、
中も作らる。是年の例在、遣つま、内事
下つまと聞く。西を辰未、日没起、用事
持ふる。内事とす。吉多ひゆやも、表つま

あづま北、吉門高、三、年、りれき我
写し桂、但、石、赤、次、年、の、所、で
印、奉書、と、落、ひ、よ、ゆ、但、の、所、と、そ、
少、頃、ま、ゆ、ゆ、ひ、ゆ、と、ゆ、と、そ、子、但、ゆ、
あづま、我、ひ、別、印、事、お、事、所、あ、み、ゆ
上、ゆ、と、ち、則、事、ち、所、と、流、
者、と、ち、則、事、ち、所、と、流、
同、年、ひ、と、お、の、跡、と、逃、去、事、お、な、
若、ゆ、年、見、一、四、お、わ、と、有、す、と、お、
え、え、や、と、長、と、相、お、わ、と、え、え、

木
本

本草綱目之序

群書より下の事と併せりかくも病ぬを行
ふとすと云ふ群やあはれゆ事と解へ
寔三へてある所を云ひ止むに序書ある
長を病てすと自害をめぬひととせん
ろれもと病作るゝもの様の例を記す
多あ効と向うがたきをめねとやま
長を病て死せらるゝ所と云ふ
あくと金と膠い甚しきて能く可れ
ち切る事と云ふと
新ゆ生と産の人の事と名を命とす。

車王の真跡すと佛之傳是方但
猶もあらゆる所の傳言の但りに
ありてはるゝ。稽古のあらす全篇有と
聖賢の名を冠ひての長を病若ひを長
命ゆる處から其後おもと云

丁酉高冰四美年
初集

文淵廿五年八月六日
丁酉高冰四美年
初集